

Inequality Revisited

Ryoichi Imai

Inequality 2015

A Report by Mizuo Research Co.,
commissioned by the Cabinet Office

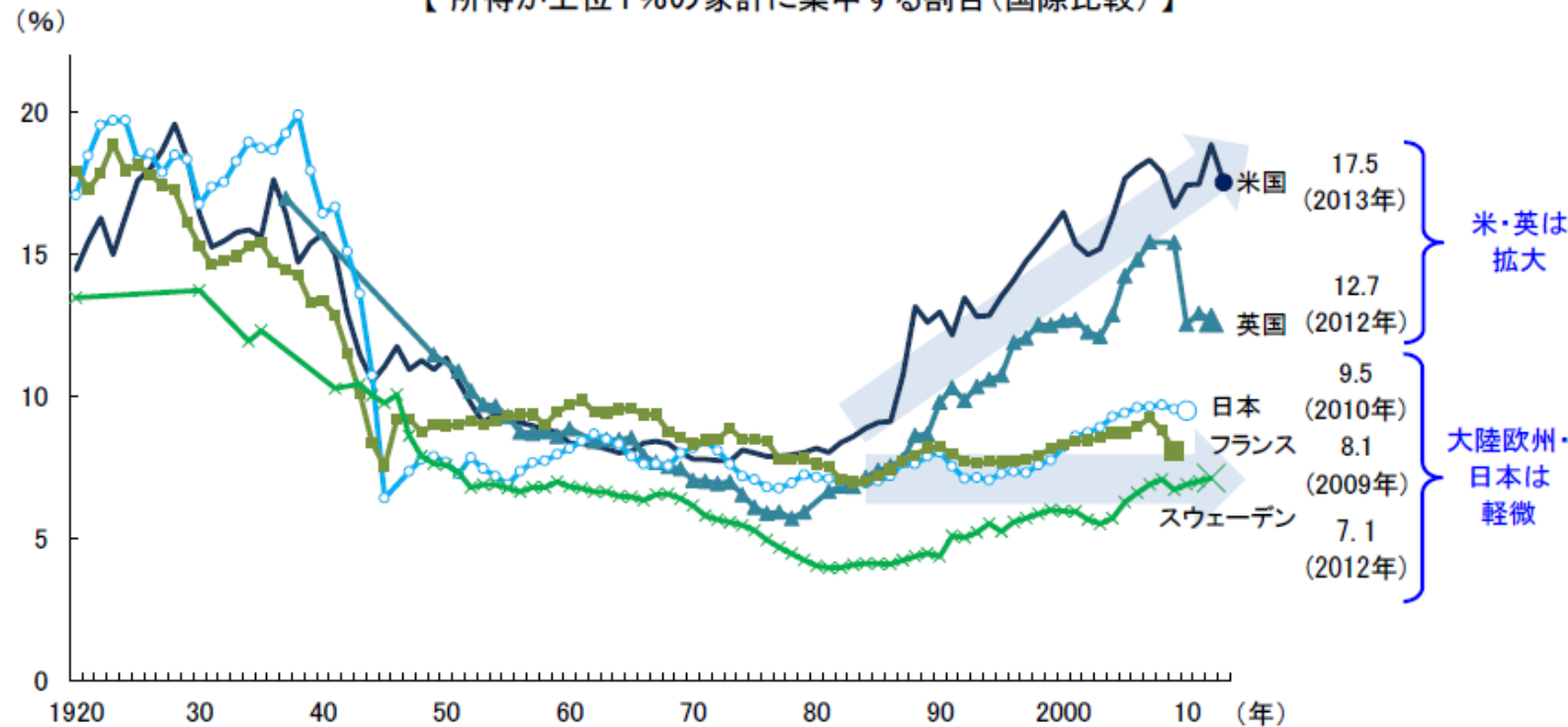
https://www.cao.go.jp/zei-cho/content/20150827_27zen17kai7.pdf

2(1) 所得格差の国際比較 ① ~ 先進国では、米英で大きく拡大

○ 1980年代以降、所得格差は米英で大きく拡大、1920年代以来の水準

- ・ 先進国の所得格差は、1900年代前半の低下傾向を経て、1940年代頃から横ばいに転じ、米英では1980年代から拡大
- ・ 1980年代以降も、大陸欧州・日本の所得格差は相対的に軽微

【所得が上位1%の家計に集中する割合(国際比較)】



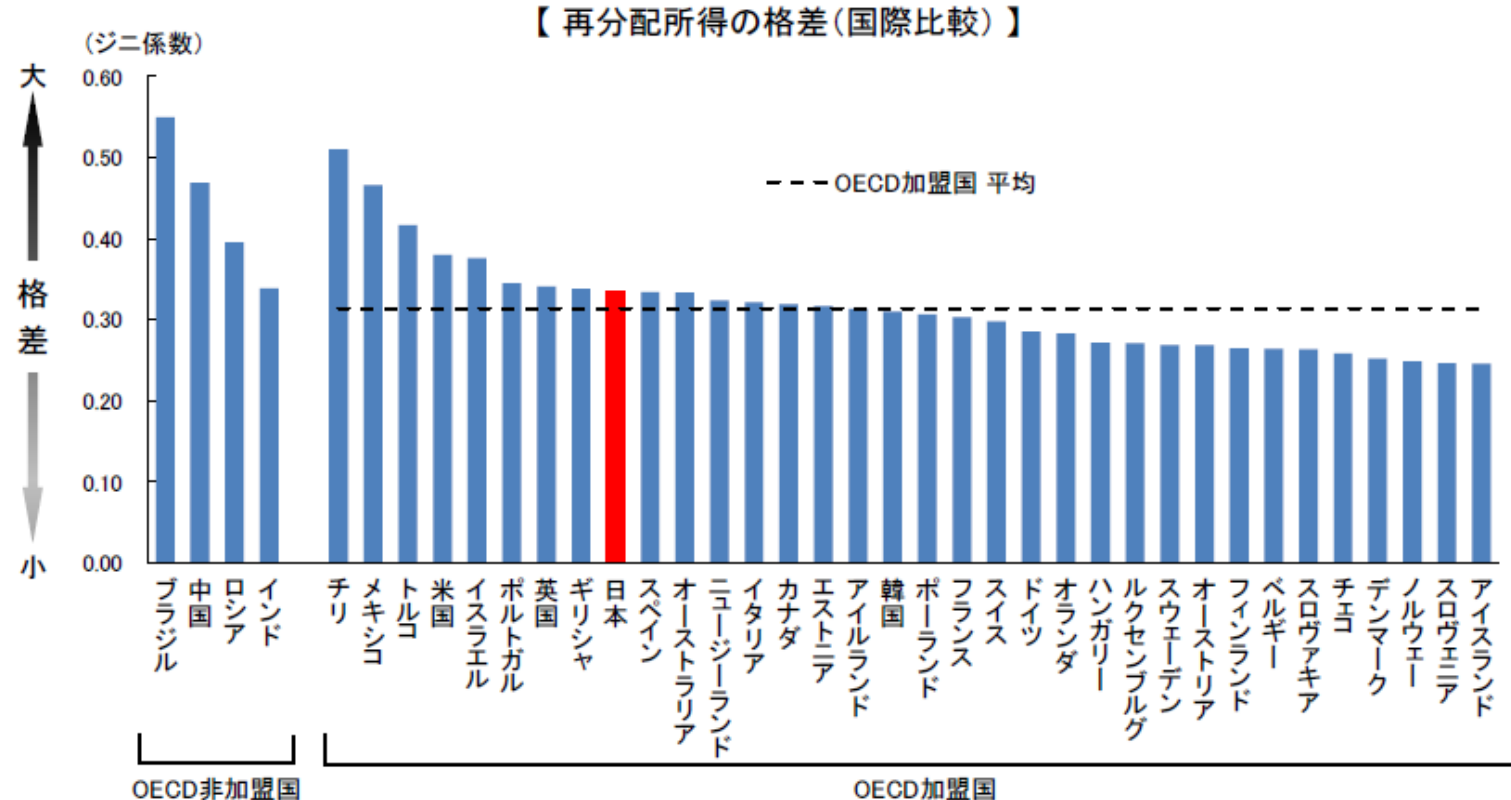
(注)再分配所得。所得はキャピタルゲインを含まない。

(資料)The World Top Income Databaseより、みずほ総合研究所作成

- Income share of the top 1% since 1980s
 1. remarkably increases in US and UK.
 2. remains or slightly increases in continental Europe and Japan.
- In US and UK, income concentration at the top 1% is now so high as in the early 20th century.

2(1) 所得格差の国際比較 ② ~ 新興国を含め、日本より所得格差が大きい国は多い

- 新興国を含め、日本より所得格差が大きい国は多い
- ただし、日本の再分配所得のジニ係数はOECD加盟平均をやや上回り、先進国の中では所得格差が大きい



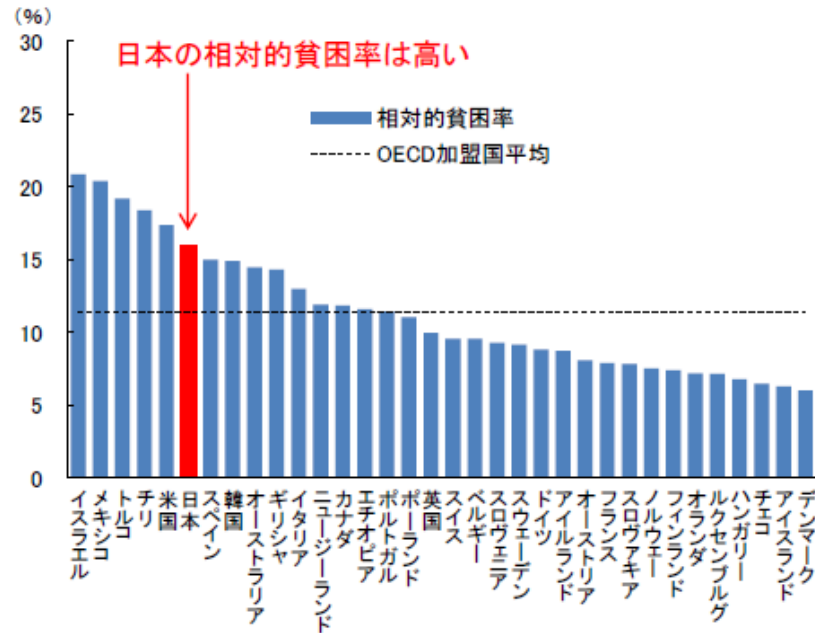
(注)1.ジニ係数の国際比較。ジニ係数は所得等の分布の均等度を示す指標の1つ。ゼロに近いほど格差が小さく、1に近いほど格差が大きいことを示す。
 2.中国は2014年、米国・インドは2013年、ブラジルは2011年、日本は2009年、その他は2012年。インド、中国、ブラジルは、その他の国と算出基準が異なる点に注意が必要。
 (資料)OECD資料より、みずほ総合研究所作成

- Japan belongs to the group of countries with higher income inequality.
- However, Brazil, China, Russia, US, UK are more unequal countries.

2(3) 貧困率の国際比較 ～ 新興国、日本、アングロサクソン諸国等で貧困率が高い

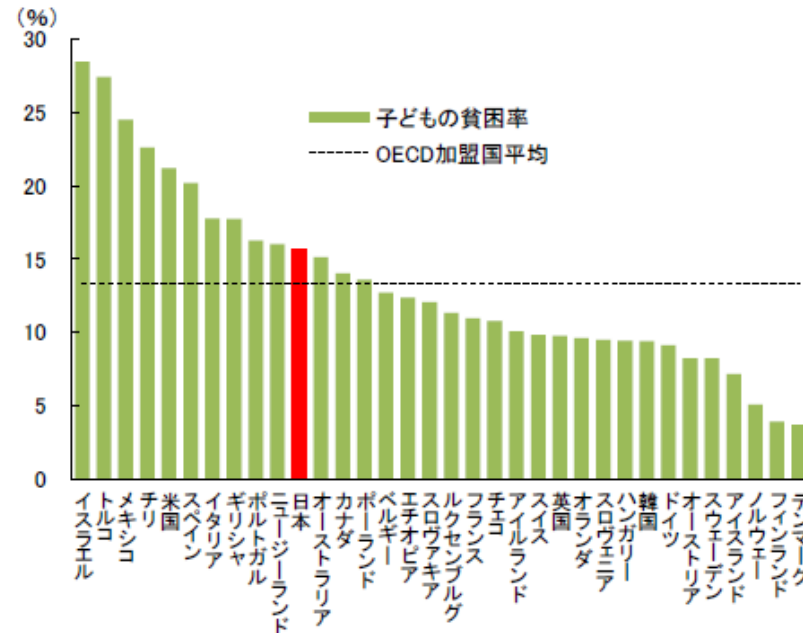
- 相対的貧困率(可処分所得が中央値の半分未満の人の割合)は、新興国・アングロサクソン諸国で高く、北欧・大陸欧州諸国で低い
- 日本の相対的貧困率は、先進国の中では高いが、人口の高齢化などの影響を考慮する必要

【相対的貧困率(国際比較)】



(注) 等価再分配所得(世帯規模を考慮した1人あたり再分配所得)で見た貧困率(年齢計)。チリ、日本、ニュージーランド、スイス、ハンガリーは2009年、それ以外は2010年のデータ。
(資料) OECD Statisticsより、みずほ総合研究所作成

【子どもの相対的貧困率(国際比較)】



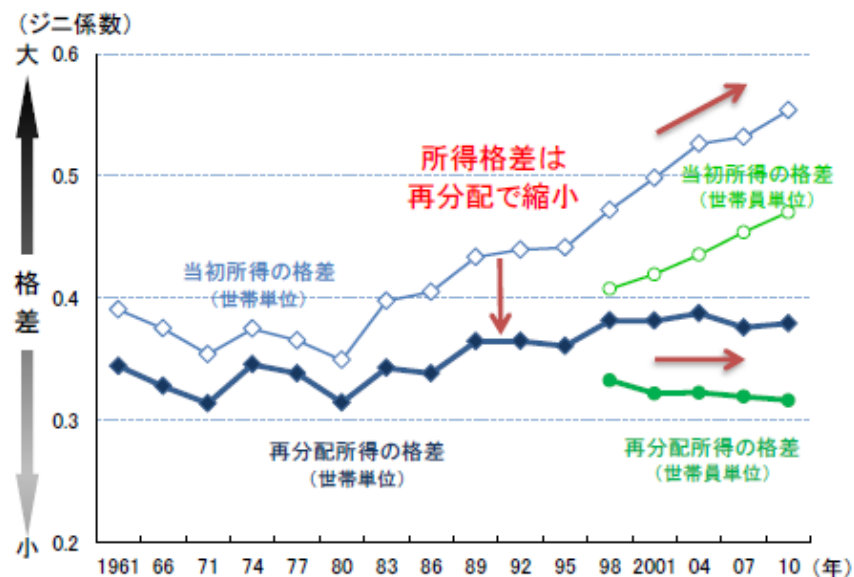
(注) 等価再分配所得で見た貧困率(0~17歳)。チリ、日本、ニュージーランド、スイス、ハンガリーは2009年、それ以外は2010年のデータ。
(資料) OECD Statisticsより、みずほ総合研究所作成

- Japan's relative poverty ratio is higher than that of most of OECD countries, except for US, Chile, Turkey, Mexico, and Israel.
- Japan's poverty ratio of children is also higher than the average poverty ratio of OECD countries.

3(1) 所得・資産格差 ① ～ 当初所得格差は拡大するが再分配所得格差は横ばい

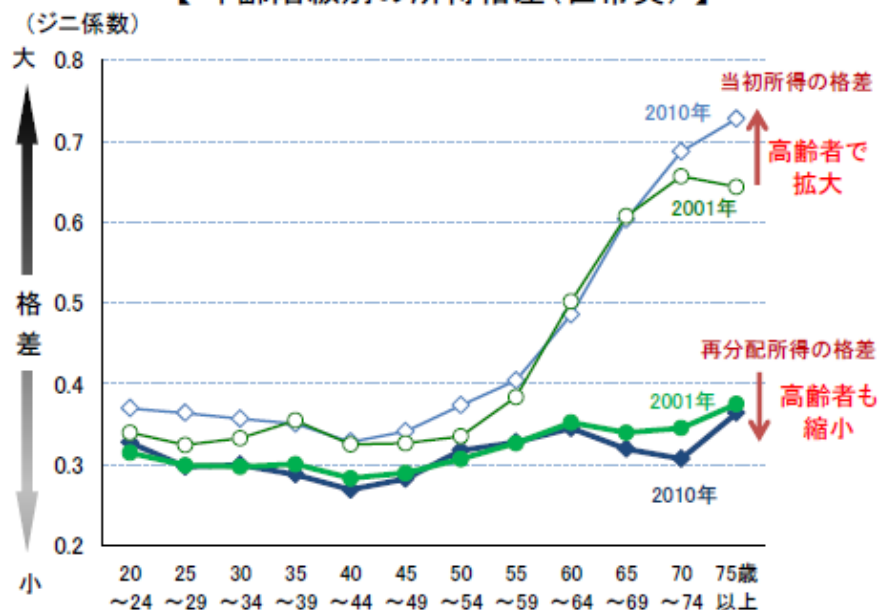
- 世帯単位でみた当初所得格差は拡大するが、2000年代以降の再分配所得格差は横ばい
- 単身世帯の増加等を排除した世帯員単位(等価所得)で当初所得格差は拡大しているが、再分配所得格差は縮小
- 年齢階級別には、当初所得は高齢者ほど格差が大きく、75歳以上でその格差は大きく拡大
 - ・ 再分配所得は、年齢階級別で大きな差はなく、高齢者の格差も縮小

【 所得格差の推移 】



(注)1.ジニ係数の推移。ジニ係数は所得等の分布の均等度を示す指標の1つ。ゼロに近いほど格差が小さく、1に近いほど格差が大きい。
 2.世帯員単位の所得格差は、等価所得の格差。等価所得は、世帯の所得を世帯人員の平方根で除したもので世帯員単位の所得とみなしたものである。
 3. 1961年から77年までは私的給付(仕送り、企業年金、退職金等)を当初所得に含めない。
 (資料)厚生労働省「所得再分配調査」各年版より、みずほ総合研究所作成

【 年齢階級別の所得格差(世帯員) 】



(注)世帯員の年齢階級別ジニ係数(等価所得)。ゼロに近いほど格差が小さく、1に近いほど格差が大きい。
 (資料)厚生労働省「所得再分配調査」(2002年、2011年)より、みずほ総合研究所作成

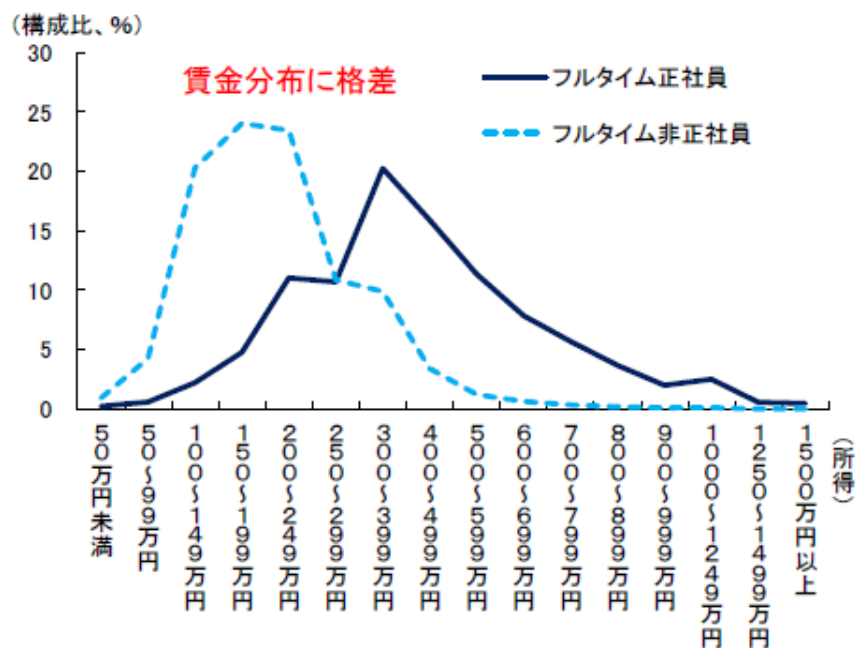
- In Japan , the Gini coefficient after redistribution is much lower than that before redistribution.
- The Gini coefficient after redistribution remains stable in the last decades.
- Income inequality before redistribution has risen among the retired generations, while that after redistribution has decreased.

3(2) 雇用・賃金格差 ② ～ 足元の勤労世代の格差拡大は確認できず

○ フルタイム正社員とフルタイム非正社員では賃金分布に大きな差。非正社員の増加は1990年代後半以降に生じた勤労世代の賃金格差拡大の主要な要因

○ 勤労者世帯の世帯収入のジニ係数からは、足元で勤労者世帯で格差が拡大する様子は確認できない

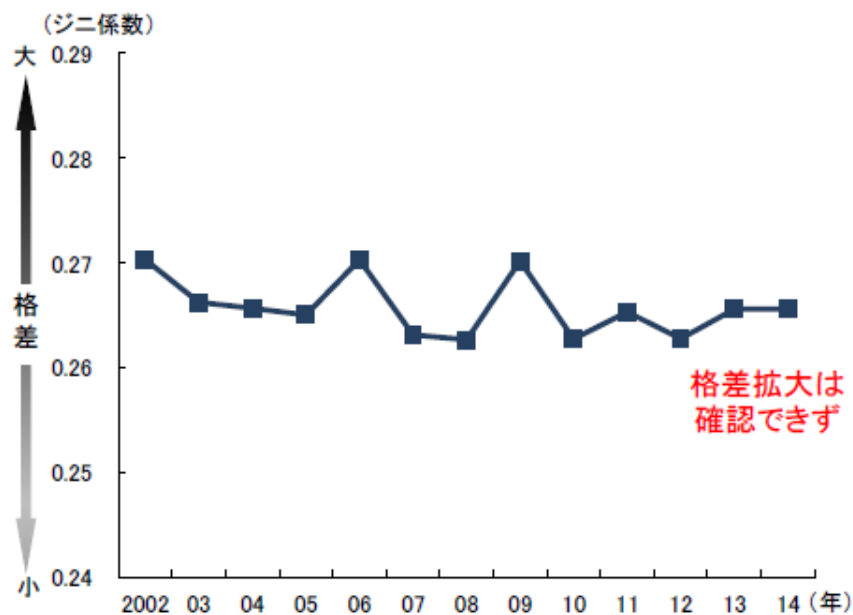
【フルタイム正社員とフルタイム非正社員の所得分布】



(注)ここでの所得は本業から通常得ている年間所得(税込み)、フルタイムは年間200日以上・週35時間以上としたもの。

(資料) 総務省「就業構造基本調査」(2012年)より、みずほ総合研究所作成

【勤労者世帯の世帯収入の格差の推移】



(注)1.ジニ係数の推移。ゼロに近いほど格差が小さく、1に近いほど格差が大きい。

2.平均世帯収入(1年間の現金収入)の5分位階級別・平均世帯収入等のデータにより計算。

(資料) 総務省「家計調査」各年版より、みずほ総合研究所作成

- Wages are distributed more unequally for non-regular than regular workers.
- Among the households in the working generation, there is no evidence to show inequality rising.

4(3) 高所得者層の実態⑥ ～ 個人金融資産の拡大、富裕層の拡大

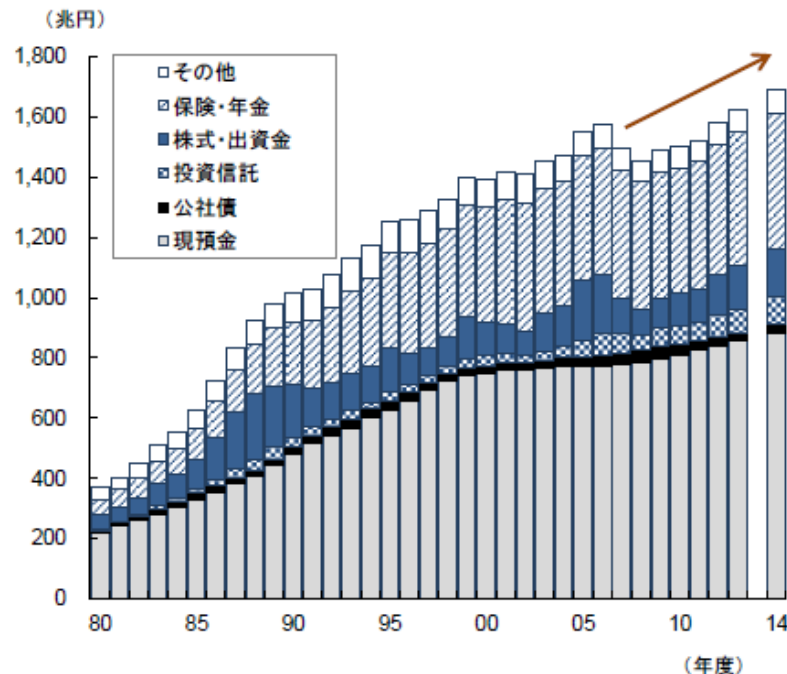
○ 14/12末の日本の個人金融資産は1,694兆円で、増大傾向が続く

・ 現預金比率は52%の一方、リスク性資産(株式+債券+投信)は15%

○ 日本の運用資産100万ドル以上保有の富裕層は世界的にも多い

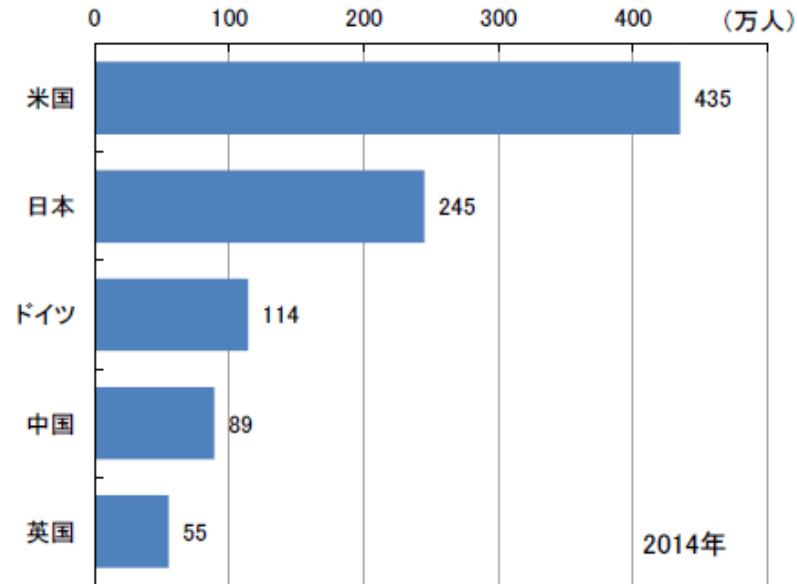
・ 調査試算により差はあるが、世界で2,3番の地位。最近も上昇するが、世界的に中国の急上昇が顕著

【日本の個人金融資産の推移】



(資料) 日本銀行より、みずほ総合研究所作成

【運用資産100万ドル以上保有する人の多い国ベスト5】



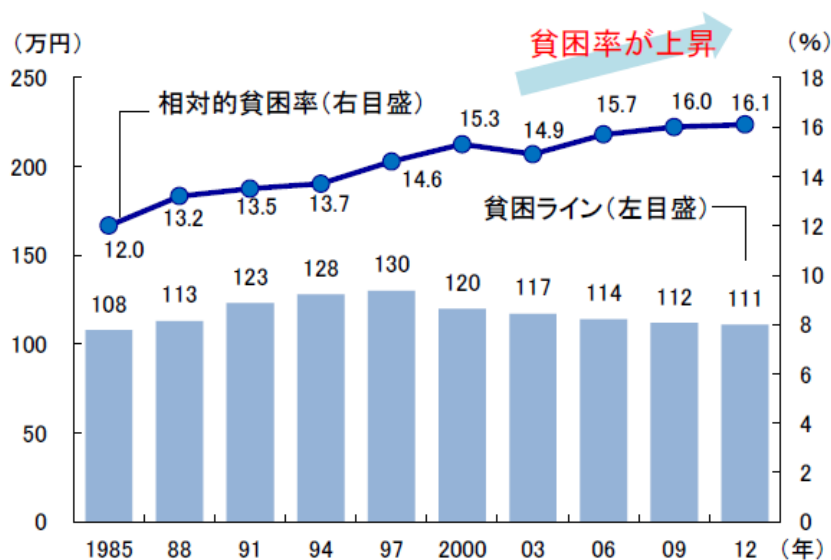
(資料) Capgeminiより、みずほ総合研究所作成

- The households' total financial wealth has continued to grow.
- The population of millionaires is
 - 4.35 millions in US
 - 2.45 millions in Japan.
 - 8.9 millions in China.
- If population is normalized, the ratio of millionaires is higher in Japan than in US!
- (, while there are more billionaires in US.)

4(4) 貧困層拡大 ① ～ 1980年代以降、相対的貧困率の上昇が続く

- 日本の相対的貧困率(可処分所得が中央値の半分未満の人の割合)は、1985年の12.0%から2012年の16.1%へ上昇
- 生活保護を受ける世帯の割合(被保護率)は、母子世帯やその他の世帯(主に勤労世代)で上昇。年金制度の充実により低下していた高齢者世帯の被保護率も、2000年代以降は緩やかに上昇

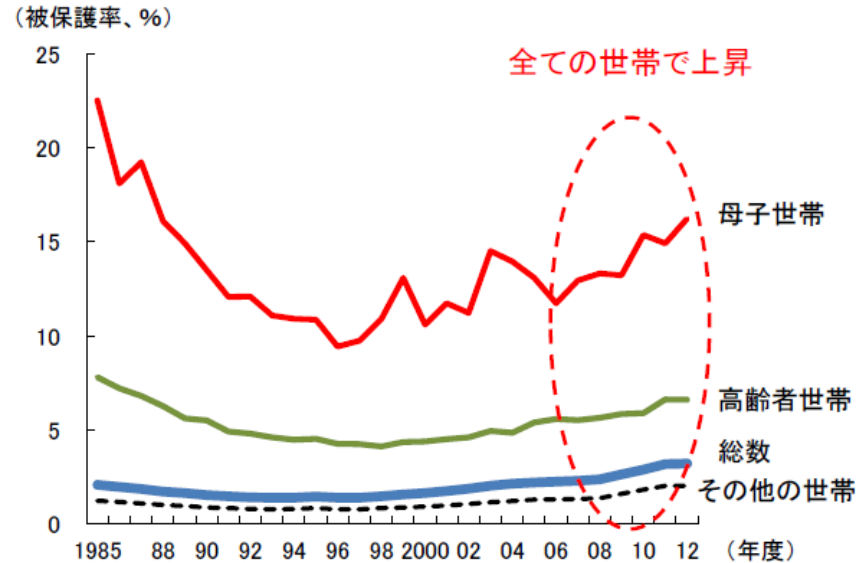
【相対的貧困率と貧困ラインの推移】



(注) 貧困ラインは、等価可処分所得(世帯規模を考慮した1人あたり可処分所得)の中央値の半分に相当する所得水準。図表中の金額は、1985年を基準とした消費者物価指数(持家の帰属家賃を除く総合指数(2010年基準))で実質化したもの。相対的貧困率は母集団のうち貧困ライン未満の人の割合。

(資料) 厚生労働省「国民生活基礎調査」(2013年)より、みずほ総合研究所作成

【世帯類型別にみた生活保護の被保護率】



(注) 世帯類型別の被保護率は、世帯類型別の被保護世帯数を各世帯類型の世帯数で除したもの。2011年は岩手県、宮城県及び福島県、2012年は福島県を含まない。

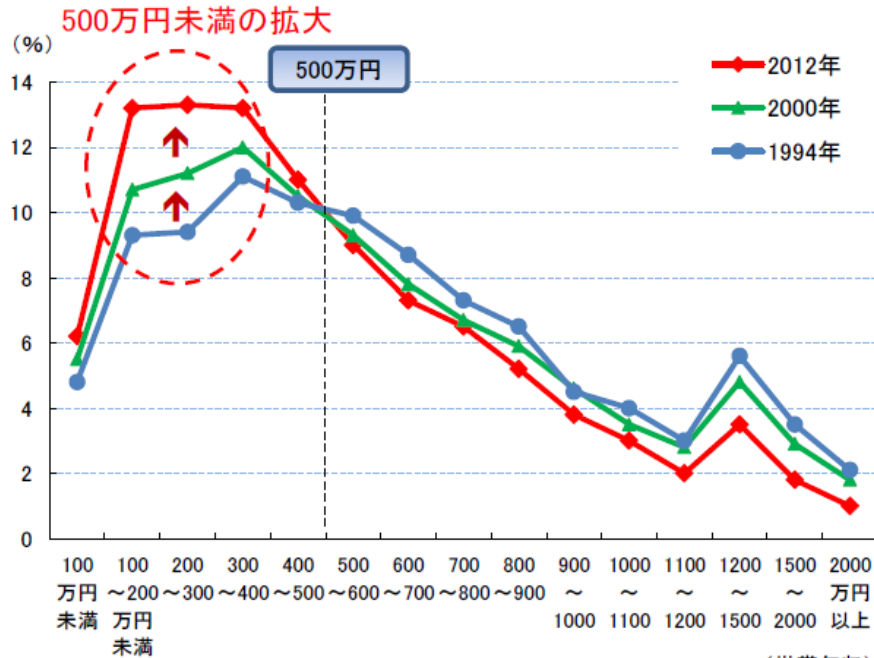
(資料) 国立社会保障・人口問題研究所「社会保障統計年報(2014年版)」より、みずほ総合研究所作成

- Relative poverty ratio is steadily rising.
- More than 15% of single-mother households receive income support from the government.
- Population receiving income support is steadily rising.

4(5) 中間層衰退 ① ～ 年収500万円未満世帯の増加

- 年収500万円以上の世帯割合が低下
 - ・ 年金受給世帯の増加などを背景に、世帯年収500万円を境に年収が低い方へシフト
- 1人あたり可処分所得(中央値)は2000年代以降減少し、2012年の実質値は221万円と1980年代の水準に
 - ・ 中間層の所得水準が低下し、貧困層に転落するリスクが高まっている可能性

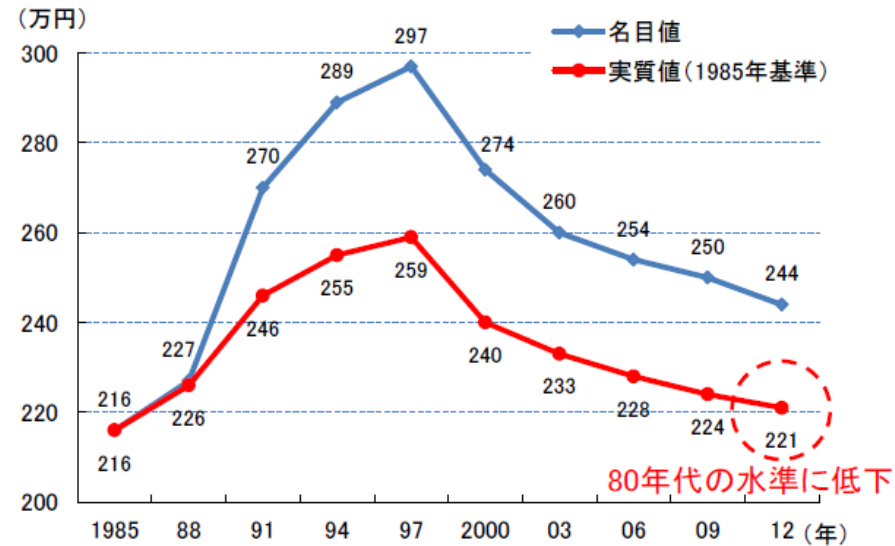
【世帯年収の分布】



(注) 平均年収は1994年が最も高い。

(資料) 厚生労働省「国民生活基礎調査」各年版より、みずほ総合研究所作成

【1人あたり可処分所得の中央値】

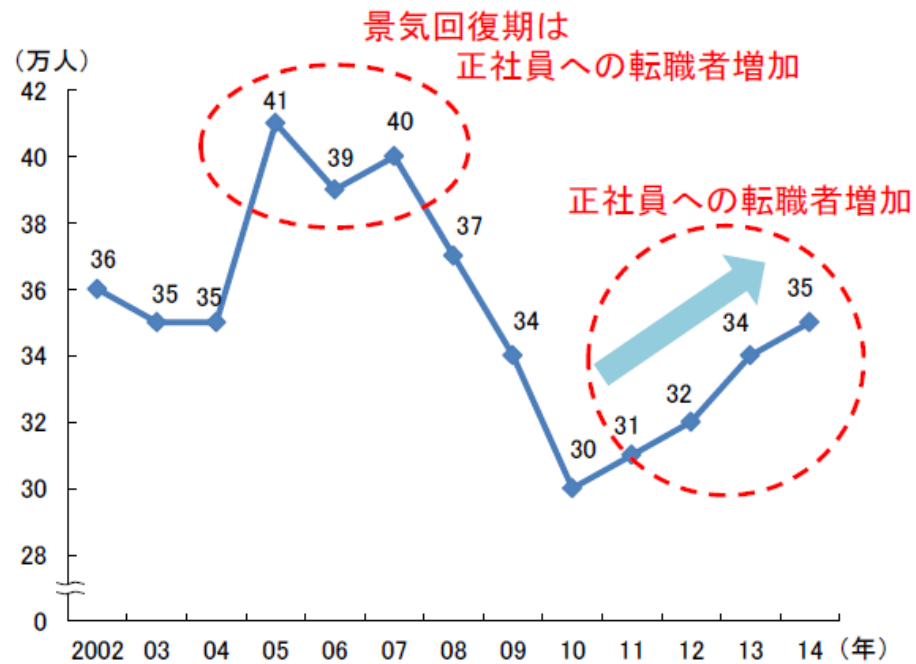


(注) 等価可処分所得(世帯規模を考慮した1人あたりの可処分所得)の推移。実質値は1985年を基準とした消費者物価指数(持家の帰属家賃を除く総合指数(2010年基準))で調整したもの。

(資料) 厚生労働省「国民生活基礎調査」(2013年)より、みずほ総合研究所作成

- The distribution of household income has shifted to the left in the last decades.
- The median income (nominal and real) peaked in 1997, and has continued to decrease since then.
- Now the median real income of households is equivalent to its level in 1980s.

【非正社員から正社員への転職者数】

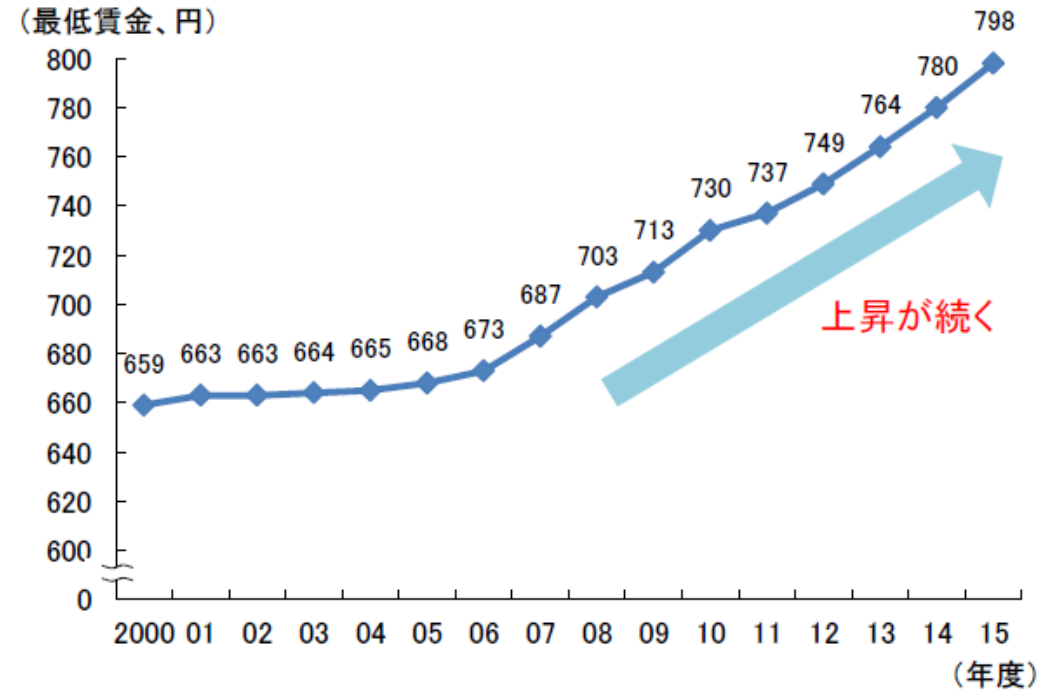


(注) 転職者とは、就業者のうち前職のある者で、過去1年間に離職を経験した者。
 (資料) 総務省「労働力調査(詳細集計)」各年版より、みずほ総合研究所作成



More than 300 thousands non-regular employees turn to be regular ones every year. The turning ratio rises in economic booms.

【地域別最低賃金(全国過重平均)の推移】



(注) 地域別最低賃金(全国加重平均、時間あたり)の推移。
 (資料) 厚生労働省資料より、みずほ総合研究所作成



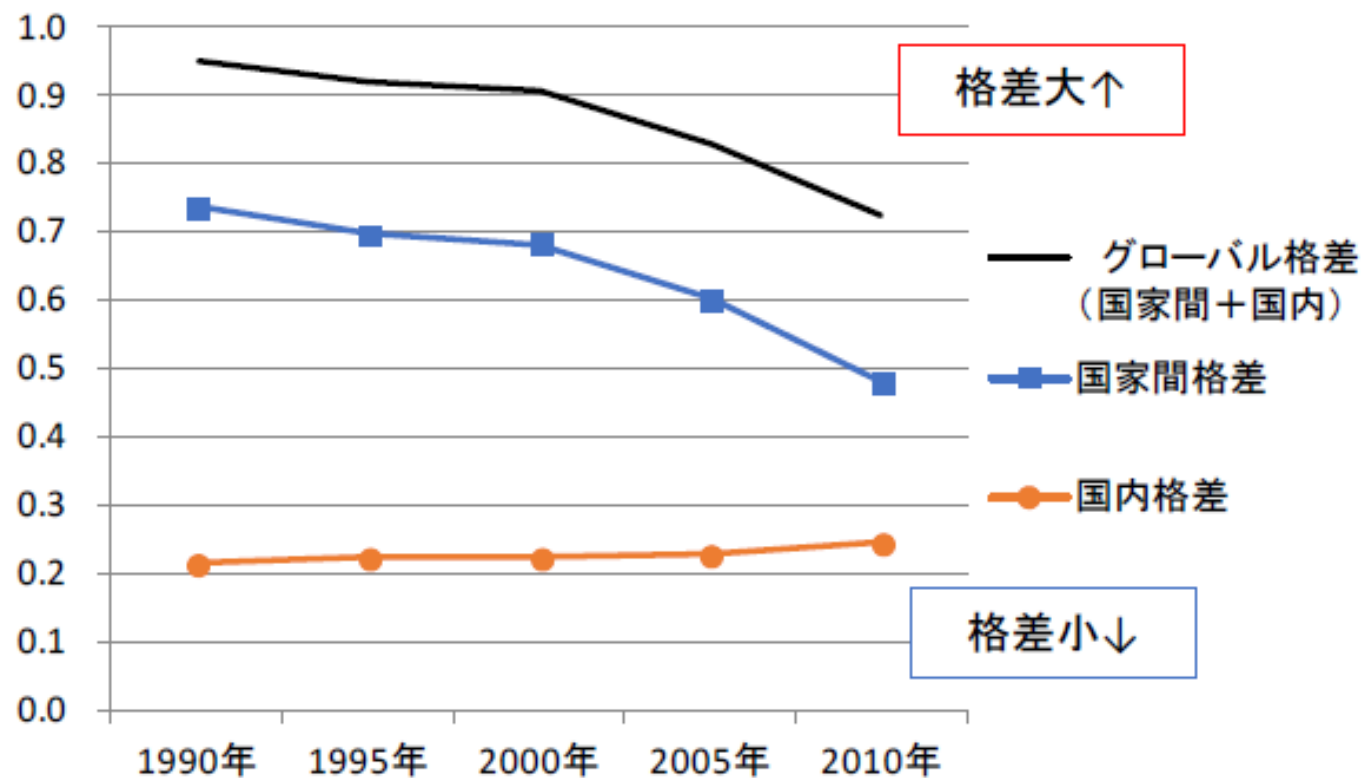
Since 2006, the minimum wage has steadily risen. Now the minimum wage earners receive 20 % higher annual income than in 2000.

Globalization and Inequality

A Daiwa Research Report

https://www.dir.co.jp/report/research/policy-analysis/human-society/20181002_020345.pdf

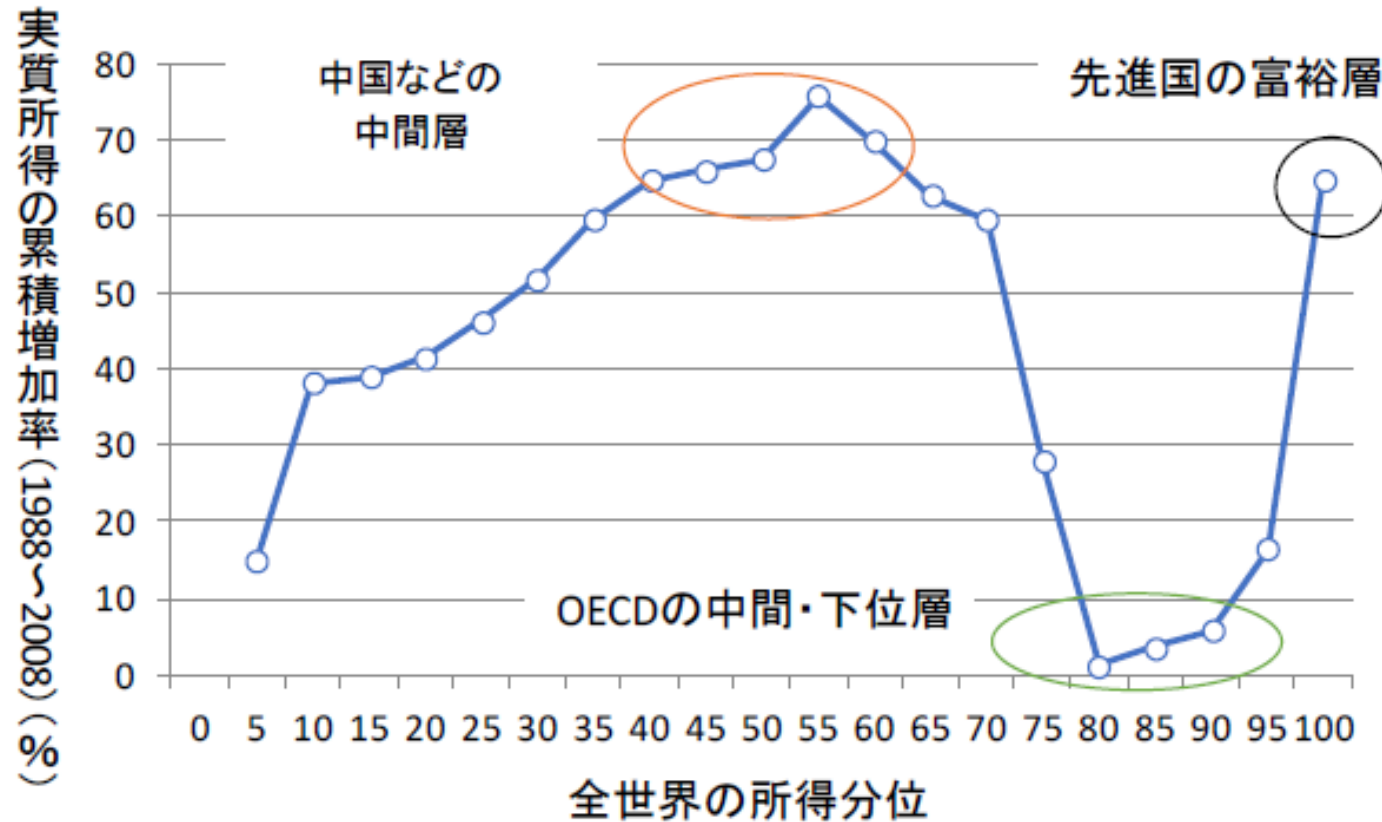
図表1 グローバルな所得格差



(出所) Bourguignon, François. (2015) p. 42 Table 1 より大和総研作成

It is widely agreed by the experts that globalization has reduced inequality across countries, while it has increased inequality within each country.

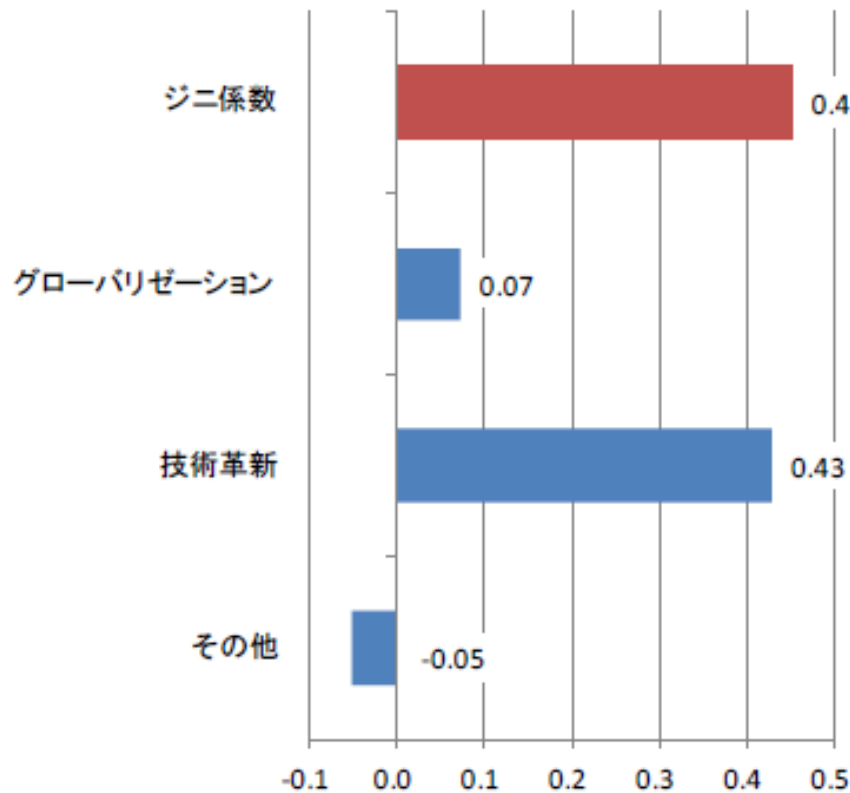
図表5 エレファントカーブ



(出所) Lakner, Christoph, and Branko Milanovic. (2015) "Global Income Distribution: From the Fall of the Berlin Wall to the Great Recession," World Bank Economic Review. より大和総研作成

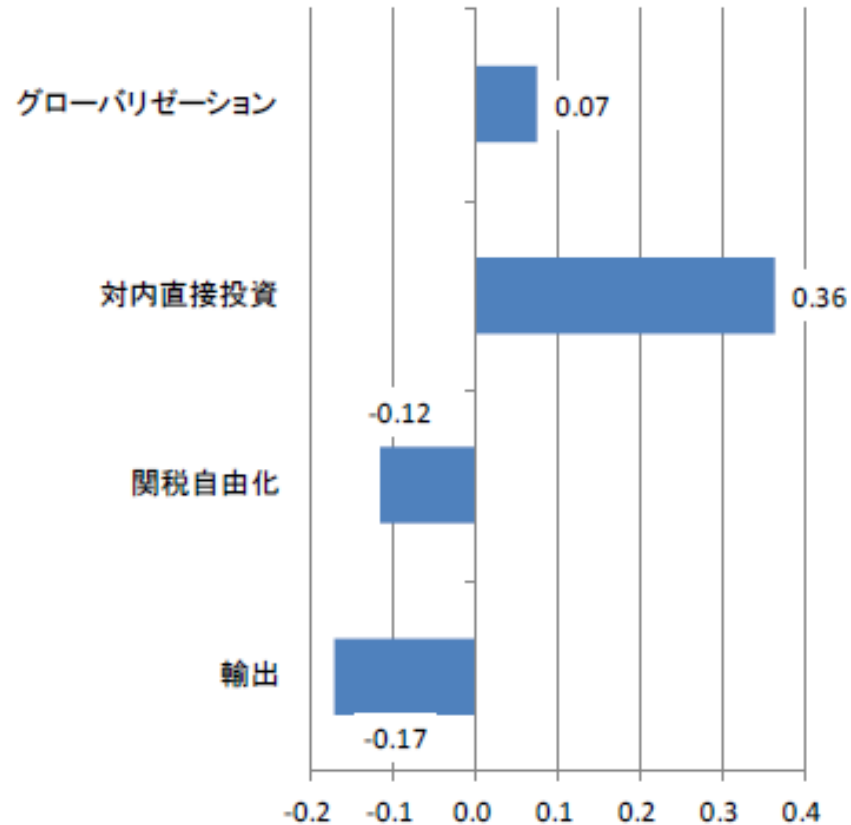
1. Rich people in the advanced countries and people in the middleclass of emerging countries gain a lot from globalization.
2. People in the middle and lower class of the advanced countries gain a little from globalization

図表6 所得格差拡大の要因分解



(出所) IMF (2007) より大和総研作成

図表7 グローバリゼーションの寄与の内訳



(出所) IMF (2007) より大和総研作成

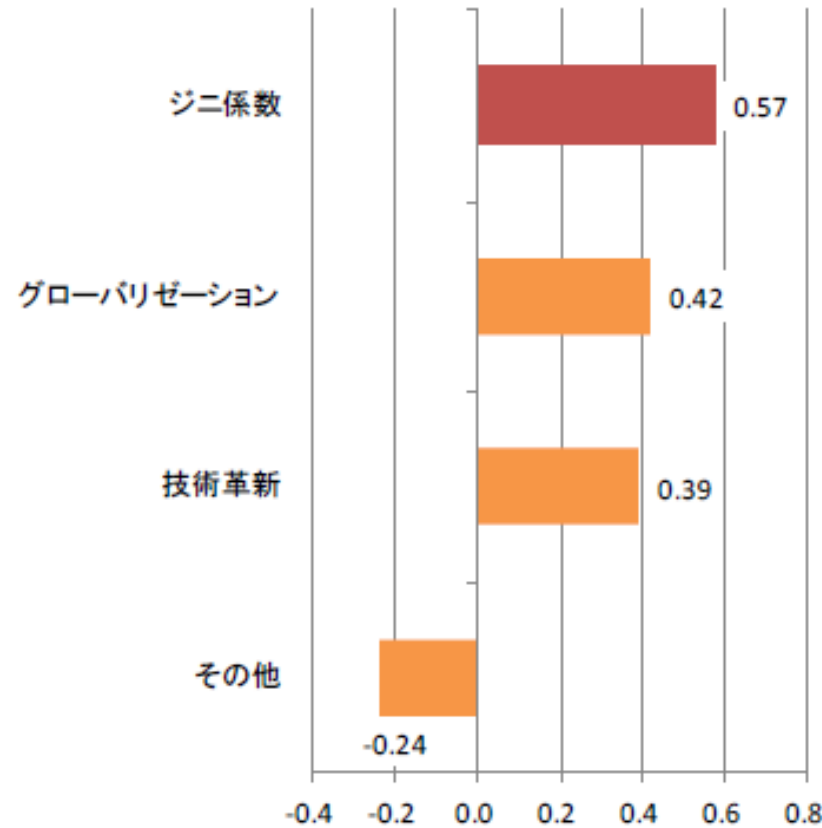
Graph 7

1. The effect of globalization on rising inequality is small, because it involves forces which work into opposite directions.
2. On one hand, investment by foreign investors tends to increase inequality.
3. On the other hand, tariff autonomy and exports tend to reduce inequality.

Graph 6

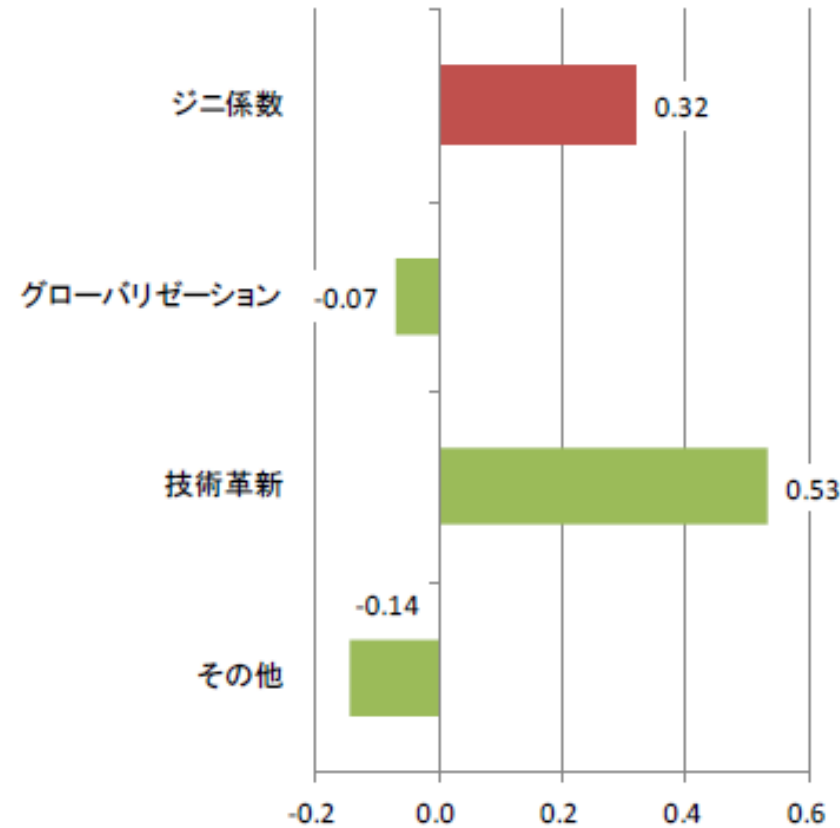
1. Inequality has risen (Gini coefficient increases) in the world.
2. Rising inequality is mainly explained by technological innovation, and a little by globalization.

図表 8 先進国の所得格差拡大の要因分解



(出所) IMF (2007) より大和総研作成

図表 9 新興国の所得格差拡大の要因分解



(出所) IMF (2007) より大和総研作成

1. Domestic inequality rises both in advanced and emerging countries.
2. Both globalization and innovation have remarkably increased inequality in advanced countries.
3. In emerging countries, innovation is the main reason for rising inequality, while globalization does not matter.

図表 10 格差拡大の要因分解



(出所) Debla-Norris et al. (2015)

1. Flexible labor market increases inequality in advanced countries as well as in emerging countries.
2. In advanced countries, skill premium is a more driving force toward rising inequality.
3. In emerging countries, flexible labor market is the most strong factor to increase inequality.